

今月のみことば 2016年3月

「私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。
主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。
あなたの真実は力強い。」（哀歌3章22、23節）

自然災害はなぜ起きるのか



5年前の2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北と関東の沿岸部に壊滅的な被害をもたらしただけでなく、「想定外」の津波に襲われた東京電力福島第一原発からの放射能漏れによる被害は今も続き、事故収束のめどは立っていない。

人々は問う。「神が愛であるなら、なぜこのような災害が起きるのか」「そもそも神には災害を止める力がないのか」と。

ところが、被害の甚大だった東北地方に入ったボランティアの人々が驚いたのは、そのような問いをする人に

ほとんど出会わないことであった。

東北で医師をし、聖書翻訳でも著名な山浦玄嗣氏は「なして、おらあこんな目に遭わねばなんねえんだべ」という恨み言を聞いたことは一度もない、と断言する。東京から来るジャーナリストが異口同音に「神さま、仏さまはなぜ人々をこんなむごい目に遭わせるのか」と問うので困ってしかたがない、なぜ判で押したように同じことを聞くのだろう、と仲間にごぼしたところ、出た結論は「暇だからでねえが?」ということだった(!)という。

聖書を見ると、「神はなぜこのようなことが起きるのを許されたのか」という問いはどこにも書かれてはいない。むしろその逆である。「あの自然災害でなぜこんなにも多くの人々が死んだのか」ではなく、「なぜ死ぬ人がこれだけで済んだのか」であり、「なぜ時折自然災害に襲われるのか」ではなく、「なぜこれぐらいの頻度で済んでいるのか」なのである。

聖なる神が、本当の意味で私たちにふさわしい対応をなさるとしたら、自然災害がこれだけで済んでいること、死者がこれだけで済んでいること自体が驚きでなければならない(太平洋戦争という、人為的な原因で310万人の日本人が命を落としたことを思い起こしてほしい)。

実に、神は私たちが思うよりはるかに恵み深い方であり、私たち人間は自分が思うよりはるかに罪深い存在なのである。

